The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	<書評>佐野みどり・並木誠士著『中世日本の物語と絵画』
Author(s)	羽生, 清
Citation	デザイン理論. 2004, 45, p. 86-89
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53081
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

佐野みどり・並木誠士著
『中世日本の物語と絵画』
放送大学教育振興会　2004年

羽生　清／京都造形芸術大学

本書は八世紀の院政時代から一六世紀の安土桃山時代までを中心に，物語絵画というジャンルを考察し，美術の側から中世のメンタリティを明らかにしたものである。歴史を連続体として捉え，院政期美術を古代・中世を結ぶもの，戦国時代を中・近世の過渡期的様相として眺め，従来の美術や時代の区分からは見えてこなかった絵画の社会的役割に迫っている。また，院政時代までを佐野みどり氏，それ以降を並木誠士氏，とくに中世の信仰と絵画をめぐる特論を鷹巣純氏が担当し，その複眼的な視点がこの書物に奥行きを与えている。

平安時代に作られた『伊勢物語』や『源氏物語』，貴族社会が終焉し武家社会へと転ずる時代に生まれた『平家物語』から軍記物へ，鎌倉仏教隆盛とともに活気づく縁起物。それらが絵画としてのまとまりをみせてゆく中世を，過去の出来事としてではなく今日の問題へとつなげる語り口は，サスペンスに満ちている。それは，放送大学のテキストとして作られた配慮の結果であったのかもしれない。テレビ画面上の探偵とともに絵画の意味について推理してゆく面白さは格別であろうが，それぞれの興味と知識に合わせてゆっくりと読書するのも，また楽しい。

絵画は構成と色彩からのみ成立しているわけではない。成程，尾形光琳の「燕子花図屏風」は，デザイン（意匠計画）という言葉を端的に示している見事なレイアウトと色彩構成の例である。しかし，背後に存在する物語と共振することによって，はじめて十全に享受できるものでもある。「この作品は『伊勢物語』第九段の三河八橋で燕子花の咲き乱れる様子を見て和歌を詠む場面を取材しているが，この場面があまりにも有名であるために，光琳は，燕子花の花群だけを描いて物語の場面を象徴的に表現している。」物語のイメージが人々のなかに広く浸透していればこそ，大画面の屏風絵から掌に納まる花札まで，日本の絵柄は物語と結びついて精神の基層となった。我が国のメンタリティが，支配者の歴史や政治経済の仕組みから明らかになるとは思えない。絵画資料から見るとき，活字資料からは望めない形で，自然と生活をこよなく愛した祖先の魂が甦る。

私たちが「信貴山縁起絵巻」や「伴大納言絵巻」に魅せられるとき，物語の主要人物以上に添景の風景や人々に目を奪われているようである。「画家は物語の筋，すなわち物語の展開を描くだけに満足していない。出来事の場を，さまざまな人びとの生活，風俗の描写によって充填し，ストーリーを支える景観すなわち物語の情景を作り出す。画面のそこここに，無名の人びとの物語が満ちているといってよい。それらは画面を充填する景物，すなわち添景にすぎないが，鑑賞者はそこに，さまざまなサブストーリー，小さな物語を見つけることができる。物語の情景は，たくさんの説話的ふくらみを抱えているのだ。」言語とは違う多様な読みを可能にする絵画の魅力が存分に語られている。視覚に訴えるこの力は今日，サブ・カルチャーが勢いを持つ所以でもあろう。

中世日本の物語と絵画は，若者の心を捉えている漫画というメディアの始まりについて

考えさせる。「信貴山縁起絵巻」では「吹き出しで台詞をつけたくなるほど，戯画的な感情表現が豊かである。」絵と言葉をどのように入れるか，それは，絵巻の始まりとともに問題であった。上下式，交互式，色紙形式，画中書き入れ式など，さまざまで，「このような，絵のなかに書き込まれた台詞や場面説明を『画中詞』と呼ぶが，なかには，通常の詞書をもたず，画中詞のみで構成される，現在の漫画のような作例も室町時代になると出現する。」

物語絵をつなげ，それを巻きながらみてゆくと，アニメーションのように楽しめる。「鑑賞者の視線は，細部に留まることはあっても，大きくは右から左へという水平への動きに支配され，視線は自由気ままにさまようことはなく，左へ左へと前進し，物語の時間を進めてゆく。」更に，リアリティを求めて，描き手は実写のように迫る。「『信貴山縁起絵巻』では，一望の視野枠に遠近を複雑に交錯させ，カメラがズームインしたり離れたりしているかのような視点稼働を実現させているのだが，『伴大納言絵巻』では，カメラの高さと角度を固定して横に移動させていったかのような，一定の視覚による描写が特徴である。」また『源氏物語』柏木第二段では，「水平線を機軸に，額縁のような垂直の柱と几帳の斜線で明快に平面分割されたこの構図は，まるでカメラのファインダーが絞り込まれていくように，鑑賞者の視線を夕霧と柏木へと焦点化してゆく。」吹抜屋台と多元的な視点とが見る者を物語の世界へと巧みに誘い込んでいるのである。漫画やアニメなど今，世界の人々を魅了している日本文化は，実に長い歴史のなかで育まれてきていることに思い至る。

このような魅力的な絵巻は，なぜ生まれたのか。美術史上に燦然と輝き，私たちの文化に連なる作品を作らせた制作主体は，どこにあったのか。その謎解きもスリリングである。「絵巻の制作はたんなる娯楽，もしくは富の消費ではなく，すぐれて政治的機能を持っていた。」今様を愛し，源平それぞれを巧みに動かした策略家後白河院は，文化の力を存分に利用した。このような京の雅に抵抗し，無教養という武士へのあからさまな侮りを甘受することによって，源頼朝は平清盛の二の舞を回避し，鎌倉に武家政治体制を樹立した。「頼朝は，絵巻をありがたく見てしまうことで，後白河院の文化力に取り込まれてしまうことを忌避したと考えられるのである。」

古今東西の権力者は，芸術によって自らの周辺を飾り，その権威を視覚化してきた。その機能が地続きで世界へと広がったいま，文化の力に対する理解はいっそう切実な問題になってきている。武器で殺し合うのではなく，文化の力で高め合う国際関係というものが築けないのか。芸術に何が可能かという根元的な問いが，絵画の機能を問う本書の基底音となっているように感じられた。歴史の検証なしに自国の文化を絶対視してしまう危険を避けることが肝要だ。

宗教が各国のメンタリティによって変容するさまは，グローバル・スタンダードで世界を覆うことのできない証でもある。インドから中国を経て我が国に伝わった仏教も，また日本的なものへと変容した。日本の六道表現は，六道（地獄道・餓鬼道・畜生道・阿修羅道・人道・天道）いずれかへの転生ではなく，六道めぐりが主題になっている。和様化された六道図には，洛中洛外図同様に風俗に対する興味がみてとれる。生活のデザインを楽しむ姿勢が六道も観光地の趣に変貌させたのではないか。「正統的な仏教世界観からの逸脱という，極楽寺本から長岳寺本にいたる六道十王図が示す傾向には，山岳修験の主要な行

法のひとつである十界修行の影響があるだろう。十界修行とは，いったん擬死した行者が，悪道に見立てた山中の各所を地獄へ向かってめぐりつつ，各所で苦難を受け生前の罪を浄化することによって，浄土への往生が可能な清浄な魂として再生するというものである。」「また長岳寺本の地獄には各所を結ぶ通路や階段が描かれるが，本来の地獄には不要なこの施設は，行者がめぐり歩くにはいかにも便利であり，山中に見立てられた地獄になら必要であろう。」仏教にいつのまにか，日本の山岳信仰，さらには記紀的世界が結びついていったのである。

地獄に対する恐怖と極楽への憧憬とはセットになって，人々の信仰を促したであろう。耳で聞くことによって更に臨場感を持って人々の心を捉えた絵解きは，絵画の機能を強化したにちがいない。それは，勧進能などよりも簡便な芸能として，寺社の経済をも支えたのである。「石女地獄や両婦地獄・血の池地獄といった人気の箇所では，わざと興味を引くような語り口で中断し，灯明銭（寄付金）を追加しなければ先へ語り進めないという，熊野比丘尼の老獪な絵解きの手管が記録されている」とは面白い。

禅宗と絵画の関わりは，また違う。絵巻のように紙の上で物語が展開するのではなく，禅画は紙の奥に見る者を引き込む。余白を伴った近景と遠景で作られた構図は，俗界から離れた隠遁へと人を誘う。「十二人の僧による賛をともなう『江天遠意図』は『辺角の景』がもっとも顕著に表れた作例といってもよい。対角線方向に画面左下に近景，右上に遠景をおき，他の部分は茫漠とした余白にしている。詩では，俗塵から離れた隠逸生活を賞賛しているが，それは遠近感を強調した山水図として絵画化されている。」世俗的な権力に背を向けた禅僧によって描かれ，仲間内で思想とともに享受されていた絵が，絵師によって描かれるようになると，詩との結びつきを希薄にする。「水墨の掛軸が漢詩やそれを作った人びとに依存せず，自立して鑑賞されるようになったのである。」欲望からの自由をめざした画境が，絵師たちの技巧を競う場に変わる。

この先，日本の物語と絵画とは，どのように展開したのか。『近世日本の物語と絵画』という書物が読みたくなった。

評者は，通信教育学部学生の卒業論文の添削に悩みながら，この夏，本書を読んだ。日本の大学も，政治，法律，経済，社会，心理，文学等々で学士になった人々が更に芸術やデザインについて学ぼうとする時代になってきた。そんな好奇心旺盛で経験に富んだ学生たちの要求に応えるために，教員自身の知的な拡がりと深さが求められるとき，良い本に出会えてよかった。